

鬼畜な執事の夜のお仕事

目次

鬼畜な執事の夜のお仕事

5

番外編 鬼畜な執事の昼のお仕事

259

鬼畜な執事の夜のお仕事

窓の外に鮮やかな青空が広がっている。ふと目に入ったそれに、橋本薫子は学食の真ん中で足を止めた。

手には食べ終えたばかりの食器が載ったトレイを抱えている。狭い通路で立ち止まってしまったので、すれ違う学生が邪魔そうにしていた。

それでも薫子は目に入った空に心を奪われたまま、立ち止まっていた。

どこまでも青く切なくなるような色の空に子供の頃の思い出が甦り、その場から去り難くなっていたのだ。

あれはいつの頃だっただろう……

三歳？ それとも四歳くらい？

その頃も雲一つない抜けるような青空に惹きつけられて、薫子は飽きずに眺めていた。そのうちになんとかしてその「空」を手に入れたくなって、絵を描くようになっていた。

よく見ると、同じ青でも場所によって微妙に色が違う。だから薫子は必死になって、毎日白い紙に青い色を広げていた。

「空の絵？」

そう聞いてくれたのは誰だった？

みんなが薫子の絵を見て、ただ青い絵の具を塗りたいだけとしか思わず、もつとちゃんとした物を描きなさいと言った。しかし、たった一人だけ、それが空の絵だと理解してくれた人がいたのだ。

大叔父様だったかしら？ それとも、とつくん？

子供の頃、薫子は年に数回、「大叔父様」と呼んでいた人物の屋敷に遊びに行っていた。

まるで物語に出てくる貴族のお屋敷そのもののようなそこで、薫子の相手をしてくれたのは、大叔父様と屋敷に住んでいた年上の男の子、「とつくん」。

大叔父様はいつも薫子の絵を褒めてくれた。それが嬉しくて何枚も何枚も描いて見せたものだ。とつくんとは、隠れん坊など子供らしい遊びもしていたが、彼もよく薫子が絵を描くところを眺めていた。薫子にとって、とつくんは初恋の相手といってもいいかもしれない。

長い休みの度に二人に会いに行くのがとても楽しみだったのだけれど、いつしか足は遠のき、その頃の記憶も曖昧になってしまった。

おそらく父が、薫子が五歳の時に亡くなり、二年後に母が再婚したせいだろう。

新しい父ができた年の夏休み、「今年も大叔父様の屋敷に行くのよね」と尋ねた薫子に、母は「もう二度と行かない」と言った。

その時の母の顔が、怒っているような悲しんでいるような複雑な表情だったため、薫子は子供心

に、これ以上聞いてはいけないことなのだと理解した。

そうしてもう一度聞く機会を見つけれないまま、屋敷での記憶は少しずつ風化していった。その母と義父も、薫子が美大へ入学してすぐに車の事故で亡くなった。兄弟姉妹もない薫子に、あれが本当にあったことなのか、確かめる相手はいない。

保険金と、義父が残してくれた小さな一軒家のおかげで一人でもなんとか暮らせているのだが、ただいまと言っても返事のない家に帰るのは寂しくて、最近ではお屋敷の記憶に思いを馳せることが増えていた。

二人の遺品を整理していたある日、母の日記が見つかった。そこに書かれていたのは、『おじ様はお元氣かしら?』という言葉。大叔父様と連絡を取らずにいることを後悔しているような記述もあった。

それを読んだ時、代わりに連絡を取りたいと思ったけれど、残念ながら薫子には屋敷がどこにあるのかわからなかった。

そもそも大叔父様が何をしている人なのかわからない。

お屋敷の規模や使用人の数を考えると、大企業の社長や資産家といったところなのだろうけれど……

何一つ具体的なことを思い出せない自分もどかしい。

と、その時薫子はいきなり誰かに鋭く声をかけられた。

「ちょっと、あなた。そこに突っ立っていられると邪魔なんですけれど?」

「え? あつ……」

すっかり自分の世界に入っていたが、そういえばここは美大の学食だ。思い出に浸るあまり、周りが見えていなかった。

「もう、本当に邪魔」

声の相手はそう言いながら薫子を押しのけた。その勢いでトレイに載っていたうどんの丼が引っくり返る。

「きゃっ! やだ、あなたがすぐにどいてくれないからっ! 服にシミがついちやっただじゃない」

丼はかろうじて床に落とさずに済んだが、汁はほぼ全てぶちまけられた。しかもその際、天カスも一緒に飛び散っている。ほとんどは薫子がかぶったが、相手の服にも少しかかってしまったらしい。とはいえ薫子は絵を描く時用の白衣を着ていたので、これさえ脱いでしまえば被害は少なそうだ。

「本当にごめんなさい」

慌てて側のテーブルにトレイを置くと、薫子は白衣のポケットからタオルハンカチを取り出した。

「そんなので拭いたって汚れは落ちないわよ。クリーニングに出さなきゃいけないわ」

相手は同じ絵画科の岡江だった。彼女とは学年も同じ二年なのだが、入学当初からやけに薫子への当たりが強く、今や一方的に目の敵にされている。

友人たちは「学科でも実技でも薫子が常にトップで、岡江さんが二番だから僻んでいるのよ」と言う。

さらに決定的だったのは、岡江が好きだったという先輩と薫子が付き合ったことだ。かなりアプローチしていたらしく、当時は散々絡かまれた。

その先輩とは、彼の卒業と同時に自然消滅してしまったのだが。

「ああ、ごめんさい。いつも同じトレーナーとTシャツにジーンズで、洋服を買うお金もなさそうあなたに、クリーニング代なんて請求できないわね」

岡江は完全に薫子を馬鹿にしきった表情で、腰に両手を当てた。

確かに岡江の服は高そうな生地を使っていた。彼女は服飾系の企業のお嬢様で、いつも服だけではなく小物にもお金をかけている。こういった服はクリーニング代も馬鹿にならないのかもしれない。とはいえ汚れはそれほどひどくないし、払えないほどではないだろう。

「そのくらいのお金なら……。あ、でもこの間スケッチ旅行に出かけちゃって、現金の持ち合わせがないから、そこで下ろしてきてもいいかな？」

薫子はむつとしながらも、食堂の隅にあるATMを指さした。

「はいはい。スケッチ旅行ねえ。だから橋本さんは賞が取れたってわけね。私はスケッチ旅行に行っていないから落選したって言いたいのかしら。あなたね、この間学内コンクールで優秀賞取ったからっていい気になってるでしょ？」

「え？ それとこれとどう関係が？」

「あるわよ。今自分で言ったじゃない。『スケッチ旅行に行ったからお金がない』って。それって、『私は絵のためにお金を使ったけど、あなたは違うのね』って言っているのと同じよ！ そうやっ

て浮かれてぼーっとしてるから、人にうどんの汁をかけるまで気づかないのよね」
「えっと……」
話が飛躍しすぎだし、もはや言いがかりではないかと、薫子は返す言葉が見つからなかった。

「何よその顔っ」
呆れているのが表情に出ってしまったのか、岡江がさらに詰め寄る。

その時。

すっと黒い影が二人の間に割って入ってきた。

「大丈夫ですか？」

影——黒いタキシードに身を包んだ二十代後半に見える男性が、胸元からハンカチを取り出して薫子に差し出した。

「火傷やけどなど負われておりませんか？」

男は丁寧ていねいな仕草で薫子の汚れた服を拭き始める。

「え？」

一瞬何をされているのかわからず、薫子は呆然と男を見つめた。

ものすごく綺麗な顔の男性だ。背も高いし、もちろんスタイルだっというい。

横に分けた長めの前髪が白い額にさらりと落ちていいるのも素敵だし、眉もすつと描いたように整っている。

目はやや細めだが、くつきりとした二重ふたえが知的な輝きを放っていた。

突然の事態に対応できなかったのか、岡江も男を見つめたまま、戸惑った様子で固まっている。学食に居合わせた他の学生たちからもざわめきが起こっていた。

「ああ、やはりハンカチだけでは無理そうですね」

男はそう言って周囲を見回し、岡江に目を留めた。

「そのあなた。厨房から布巾を借りてきて下さいませんか」

急な指名を受けた岡江は、ぎよつとしたように口ごもる。

「なっ、なんで私が……」

その反応に、男は不可解なことを聞いたとでも言うように眉を上げた。

「状況を鑑みるに、あなたの方からこちらの方に衝突なさったと思うのですが……。ご自分からぶつかっておきながらクリーニング代を要求する……。あなたは当たり屋か何かですか？」

男は端整だけれどもどこか冷たく見える顔に冷笑を浮かべて、岡江を見つめる。

「な、なんなのよっ、失礼なっ！ だいたいあなた誰よっ！ タキシードなんて着てどっかの新郎？」

怒りで顔を真っ赤に染めて岡江が怒鳴った。

それは薫子も聞きたかつたので、思わず頷いて二人を交互に見る。

「私は新郎ではありません。ここにいらつしやる、橋本薫子様の執事でございます」

きつぱりと宣言した男は、薫子に向き直ると恭しくお辞儀した。

「はっ？ 執事!？」

裏返った声を放つたのは岡江か薫子か。

食堂内が一瞬シーンと静まり返る。

「何この人？ ふざけてるの？」

岡江が男を指さすが、彼は岡江を無視して、薫子の手を取った。

「お嬢様、急で申し訳ございませんが、お迎えに上がりました。今すぐ私と一緒に——」

「え、ちよつと待って……。私の執事って何それ」

無視された岡江の顔が引きつり、食堂に居合わせた人々の視線が薫子に集中する。視線が痛い。

見知らぬ男がいきなり現れ、自分の執事だと名乗る状況に薫子は動転した。しかも食堂中の注目を浴びている。

「わ、わかりましたから手を離して、それとちゃんと説明を……。あ、いや……。ちよつと別の場所へ……」

とにかくこの場を離れたいと思った薫子は掴まれた手を引いて、男を食堂から連れ出そうとしたが、男の身体はびくともしない。それどころか逆に引き寄せられ、ついには身体を抱え上げられてしまった。

それも荷物のように肩に担ぎ上げられる。

「きゃっ！ や、やめてっ！」

「失礼いたします。説明する時間が惜しいもので……」

「何、何っ、ちよつと——!」

薫子の悲鳴が食堂に響き渡ったが、すぐ側にいる岡江も他の学生も、食堂を出て行く二人を――正確には一人と担ぎ上げられた薫子を――啞然として見送るだけだった。

二

何がなんだかわからない。

今の薫子の心境を表すとその一言に尽きる。

あまりの事態に、これが現実なのかさえわからない。

それにしても気まずいし、空気が重かった。

薫子はリムジンを黙々と運転する。自称、執事を後部座席からそつと窺う。

食堂を出ると、男は大学の駐車場にまっすぐ向かい、そこに駐められていたリムジンに薫子を放り込んだ。

そこで突拍子もないことを言い出したのだ。

曰く、自分はあなたの大叔父に仕える執事である。あなたの大叔父様の余命が幾許もないため、すぐに会っていただきたい。彼にはあなたの他にほとんど血縁がないため、あなたに養女になってもらい、跡を継いでほしいと言っているとのこと。

それも、子供の頃の薫子と大叔父様が一緒に写っている写真を見せながら。

その後、各種戸籍謄本やら身分証明やらの書類まで見せられて、信じざるを得なかったのだ。が……車を発進させてからは説明どころか、一転して会話もない。

男は息すらしていないのではないかと静かきでハンドルを握り続けている。

——大叔父様があと少ししか生きられないなんて……

だからこそ薫子は大人しく車に乗っている。なんといつても、たった一人の肉親だ。

まだ生きているだろうか？ どこにいるのだろうか？

母に遠慮して、お屋敷の場所や大叔父様の名前は一切聞かなかったが、心のどこかでは、いつも気にかけていたように思う。

その大叔父様の余命がどうのと言われると、心配でならない。

しかし……。彼が語った大叔父様の話は本当なのだろうか？

この男は本当に大叔父様の執事なの？ 確かに大叔父様は、お屋敷で執事やメイドらしき使用人に囲まれていたような記憶もあるけれど……

私……。ひよつとして拉致られた？

見せられた写真も書類も本物っぽかったけれど、どちらも偽造が可能だ。

混乱していた頭が冷えてきたのか、薫子は今になって疑いと不安に慄いた。

半ば強引に車に連れ込まれたけれど、今思えばもつと抵抗できたはずだ。

もし何かの事件や犯罪に巻き込まれたのだとしたら……

そうだ警察！

薫子は白衣のポケットに携帯と財布を入れていたことをようやく思い出し、そろそろと手を伸ばす。

そのとたん——

「警察に電話ですか？」

いきなり男が口を開いた。まっすぐ前を見て運転していたはずなのに、どうしてわかったのだろうか。背中に目でもあるんじゃないかと薫子は固まってしまった。

「そうしていただいても構いませんが、警察は取り合わないでしょう。あなた——お嬢様と我が主、東三条兼須衛様の間に血縁があるのは間違いございませんし、そうでなくとも旦那様は各方面に顔の利くお方ですから」

低く、耳に心地のよい声だった。

学食に現れた時は、執事服に目を奪われ、声などともに聞いていなかった。

けれどこうして改めて執事を観察してみると、外見だけならいいところばかりだと気づいた。

声もよければ姿勢もいい。ぴんと伸びた背筋は、執事ならではのものだろうか。

食堂に現れた時、普通の格好をしていたら。そして、薫子様なんて呼ばれてお辞儀などされなければ、きつと一目惚れしていただろう。

——いやいや、今はそんなことを考えている場合じゃなくて……

薫子はぶんぶん頭を振りかけて、はつと目を見開いた。

「えっ……。東三条って……。あの東三条？」

「……『あの東三条』とは、どういう意味でおっしゃられているのでしょうか？」

そう返した執事は大げさなため息を一つつくと、リムジンを路肩に停めた。

ここは高級住宅街の閑静な道路だ。一般的な乗用車より大きなリムジンが駐車しても道幅に余裕がある。

運転席から降りた執事は、後部座席の扉を開けて薫子の真横に座った。そしてぐいと身を乗り出すようにして顔を近づけ、薫子に問いかける。

「どの東三条だとお思いなんですか？」

「ええつと……。あの東三条……」

近い。顔が近い。

綺麗な顔が真近に迫り、薫子は動揺してのけぞった。

「ですからどの？」

執事の眉毛がぴくりと跳ね上がり、意地悪そうに口角が上がる。

「あの……。その前に、顔が近いで執事さん」

きつと赤くなっているだろう顔をごまかしたくてそう言うのと、彼の眉毛がまたぴくりと動く。

「お嬢様。私は確かに執事ですが、それはあくまで役職であり、それが名前というわけではございません」

「あ、はははは。そうですね」

緊張と恥ずかしさで引きつった笑いを浮かべながら、薫子はそつと彼から距離を取った。広いリムジンだからこそできた動きだ。

「すみません、えつと……。何さんでしたっけ？」

この執事のことだ。どこかできちんと名乗っていたはず。

これでは岡江にぼーつとしているとと言われるわけだと、恥ずかしくなって、薫子は思わずうつむいた。

「これは……私としたことが申し訳ございません。まだ名乗っておりませんでしたか……」

失敗したというように唇を囁む執事。

何が悔しいんだろう？ というか色々な書類を見せてあれだけ説明しまくっていたのに、自分の名前を名乗るのを忘れていた？

意外すぎる事実、薫子はぼかんとしてしまう。

「申し遅れましたが、私は東三条家にお仕えする、萱野俊義かやのとしよしと申します。どうぞ萱野とお呼びください」

「えつと、萱野さん……」

聞き返した薫子の顔を見つめ、萱野は残念そうな雰囲気ですく頭を横に振る。

「萱野で結構。あなたは私がお仕えする東三条のお嬢様なので、使用人に対して敬称は不要です。萱野と呼び捨てになさいます」

薫子のことをお嬢様だと言いながら、萱野の口ぶりはどこか上から目線だ。

殷勤無礼いんぎんむれいを絵に描いたような態度に、薫子はなんだかさわさわわしてくる。

萱野が超がつくほど綺麗な顔をしているのもいけない。さらに、狭い空間に二人きりという状況が、彼女を落ちつかない気分させていた。

そういえば、なんで二人きりなんだろう？ 執事がいるような家なのに、運転手はいないんだらうか？

それにこの人、たぶん昔はいなかった……。って、あれから何年も経っているんだから、新しい人がいるのは当たり前か……

「あのう、執事の仕事って運転も含まれているんですか？ 私の中で執事って、そういうことをしているイメージがなくて……。それに、いつから執事をされているんですか？」

ふと湧いた疑問を薫子そのまま口に出すと、萱野はやや眉を顰めた。

「運転は本来、私の仕事に含まれておりません。今回は旦那様が人を挟まずにとおっしゃられましたので……。正式な手順を踏むなら、お嬢様をお連れするのは私でも運転手でもなく弁護士の仕事です。ちなみに私が東三条家に正式にお仕えた時期は大学卒業後ですから、三年前からですね」

「三年前ですか……。えっと、さっきから東三条っておっしゃってますが、東三条ってあの東三条ですよ」

つい、その話を蒸し返してしまうと、萱野は呆れたような視線を向けてきた。

「何度もお聞きしておりますが、『あの』とは？」

「はい。そのですよ……。銀行とか鉄道とかホテルなんかを経営している、えーっと、有名な東三条グループですよ。あ、そうだ。美術館。美術館もありますよね。あの美術館好きなんです。常設展示はもちろん、季節ごとの展示がいつも……」

「そこまでわかりなら、結構」

萱野は薫子の話を途中でばっさりと断ち切った。

「あ、はい……」

この人、なんだかやりにくい……

薫子はしゅんと項垂れる。

「とにかくお嬢様は、その東三条グループの総帥の血縁者であられるのです。それはわかりますね？ 戸籍謄本などの書類をお嬢様ご自身の目でご覧になり、納得していただいたからこそ、こうして車に乗っておられるのでは？ ひよっとして、ご理解せずに車に乗られたのですか？ それで今になって警察に電話をなさろうと？」

矢継ぎ早に言われて、薫子はしどろもどろになった。

「ええっと……。その、いやあの、だって……」

「だって、なんですか？」

その意地の悪い聞き方に、薫子はだんだん腹が立ってきた。いや、だんだんじゃない。きつと最初からだ。

お嬢様と言いなから人を勝手に担ぎ上げたり放り投げたり、小馬鹿にした笑い方をしたりして……

「だから……！ ええっと、いきなり現れて執事だお嬢様だって言われて、はいそうですかってすぐに納得できませんか？ 普通は事前に電話の一本でも寄越すとか、色々方法があるでしょう？ それに大叔父様のことだって、最後に会ったのは子供の頃よ。確かに昔はよくお屋敷に遊びに行って、

大叔様にかわいがつてもらった記憶があるけれど……。あんまり昔のことなので夢だったのかなあ、みたいな……」

うつむいたまま、薫子は一氣にまくしたてた。興奮して声が上がずる。

萱野は小さくため息をつき、薫子の顔を覗き込んだ。

「今、お嬢様がおっしゃった『大叔父様』こそ、東三条家四代目当主にして東三条グループ総帥の兼須衛様です。お嬢様は兼須衛様の姉の孫であり、妹の孫にも当たる方なのですよ」

「んん？ 意味がわからない。姉の孫で妹の孫？」

うつむいていた顔を上げ、薫子は首を傾げた。

「旦那様の姉君は嫁ぎ先で男児をもうけられました。同様に妹君は嫁ぎ先で女兒を授かり、その男女がいとこ同士で結婚なさった。それがお嬢様のご両親です。さらにわかりやすく申しますと、お嬢様は先代様の曾孫ということになりますね」

萱野の口調は、理解の悪い生徒に説明するようなものに変化していた。

「あー。なるほど」

「その後お父上はご病気で亡くなられ、母君は再婚なさった。それも東三条家が反対されていたお相手です。どういう理由での反対なのか私は推測しかできませんし、不確実なことです。あえてここでは申し上げませんが、駆け落ち同然で一緒になられたと……」

「あー。なるほど」

先程と同じ反応に、萱野が微妙な顔をした。

「えーと、理解しました。それで、今回呼ばれたのは大叔父様の血縁が、私以外ほとんどいないから、私を正式な養女にして、東三条の家を継がせたいってお話でしたっけ？」

「その通りです」

萱野はやれやれ、といった様子で首を振った。

「ご理解いただけただけで何よりです。では……」

会釈し、萱野は後部座席のドアに手をかけた。

「待って！」

「なんでしよう？」

「大叔父様の血縁の話だけれど……。確か男の子がお屋敷にいましたよね？ 記憶があやふやだけれど、母も大叔父様には私と年の近い孫がいるって教えてくれたような……。なんで彼が跡を継がないの？ まさか……彼……」

そう、いるはずなのだ。男の子が。

——一緒に遊んだ初恋の彼「とつくん」が。

今から思えばずいぶんと生意気で上から目線な男の子だった。だから彼、とつくんがお屋敷のお坊ちゃまだと思っていたのだけれど……

「はい。お坊ちゃまはいらっしゃいました。しかし彼は……。兼人様は……」

かねと……

薫子は心の中で名前を確認する。「かねと」だから私は「とつくん」と呼んだのだろうか？

それにしても萱野の歯切れが悪い。もしかして彼は、亡くなってしまったのだろうか？
薫子は言葉の続きを待った。

「……数年前に家出をなさって、行方不明でございます。今回の件で、周囲の者がお探しように申し上げましたが、旦那様は構わぬと……。死んだものとして扱おうようにとの仰せです」
「えっ！」

とつくんが家出？ 行方不明？

兼須衛ととつくんの間に何があったのか想像もつかない。けれど、なんだか妙な緊張を覚えて薫子は額に汗を浮かべた。

それに気づいた萱野がハンカチを取り出し、そっと薫子の汗を拭う。

「ちよ、あの……」

いきなり額に触れられて薫子は焦る。上から目線の慇懃無礼な男とはいえ、相手は超がつくほどのイケメンなのだ。そんなことをされると、今度は違う種類の汗が出てきてしまいそうだ。

妙に心臓がドキドキして頬が火照ってきた。

これはきつと執事の仕事。私を氣遣ったわけじゃない。

薫子は自分に言い聞かせ、なんとか鼓動を鎮める。

「ええっと、あの、でも……。私の知っている大叔様はなんというかとっても優しくって、とつくんが家出したから怒っているとか、探さないとか死んだものとして扱えとか、そんな風に言うとは思えないんだけど……」

「とつくん？」

一瞬、萱野が目を見開いた。

「え？ 孫つてとつくんのことでしょう？」

「兼人なのに『とつくん』なのですか？」

聞き返す萱野の目が眇められる。

「えっと、『かねと』の『と』を取って、『とつくん』なのかなって。よく一緒に遊んでたはずだけれど、あんまり覚えていなくて……。つてそれは今はいいでしょう。とにかく大叔様は、そんな冷たい人じゃない」

そう答えると、萱野は何故か悲しげな表情になった。しかし、それは瞬きのうちに消え、次に目を開いた時には、萱野は微かに口元を綻ばせていた。例の人を小馬鹿にした微笑みだ。実際は違うのかもしれないが、今の薫子にはそうとしか見えない。

「あまり覚えていないとおっしゃる割にはずいぶんはつきりと申されますね。人は変わるものですよ。よくも悪くも……」

「何が言いたいんですか！」

気づくと薫子は怒鳴っていた。

確かに人は変わるだろう。けれどどんなことがあっても、持って生まれたものまで変わらないのではないか。薫子は、あの頃の兼須衛の優しさは本物であると信じていた。

「とにかく」

萱野は薫子の怒鳴り声など全く耳に入っていないような顔をして、言葉を続ける。

「兼人様の代わりに……、と申しますと語弊(ごへい)がございますが、それでお嬢様をお探(たず)ねしたので。お嬢様の母君の再婚で縁を切った形になってしまったけれど、お嬢様とまで縁を切ったつもりはないと。元々兼人様に代わる跡継ぎを探(たず)ねすお心積もりではあったようですし。今回のことで旦那様も弱気になられて身内が恋しくなったということなのでしょう」

萱野の言い方に棘(とげ)を感じて、薫子はムカムカしてきた。

自分だけならともかく、兼須衛のことまで馬鹿にされたように感じたのだ。兼須衛の執事と言いつつも、ちつとも彼を理解していないではないか。

「そ、その言い方はどうなんですか？ 余命が少なくなったから、私に会おうとしているなんて、今までは縁を切った人間なんてどうでもいいと思つていたみたいに聞こえるじゃないの。大叔父様は本当に優しく……。私のこともきちんと見てくれて……」

自分がだんだん涙声になっているのに薫子は気づいた。けれど敬愛する身内をけなされて、冷静になんてしゃべれない。

兼須衛が身近な人物に誤解されていることが、なんだか悔しくて悲しい。

「全く……」

呆れたような声とともに、萱野の手が薫子の頬に伸びてきた。

その手にはさっきのハンカチが握られたままだ。今度は知らずに流した涙を拭かれたのだと理解するまでに数秒かかった。

この人……。優しいところもあるのかな？

他人に涙を拭かれるのは気恥(かたじけ)なくしかつたけれど、悪くはないなと薫子は目を閉じた。……のだが。

「あなたは本当におめでたい方だ……」

「なっ！」

ちよつとでも優しい人だなんて思つた私が馬鹿だった！

「な、おめでたいって……。だいたいね、あなた執事なんでしょ？ 私はお嬢様なわけでしょ？ なのに何よっ！」

怒りに震えた薫子が声を荒らげると、萱野はふつと鼻で笑つた。

「確かにあなたは東三条のお嬢様。しかし、中身が伴(ともな)っていないようでしたので、つい……。いえ、申し訳(わけ)ございません。たとえそうでも、執事としてあるまじき態度でした」

「なっ、なっ、なっ……」

あまりにも腹が立ちすぎて、言葉が出てこなかった。

こんな男の前で泣いてしまうのは悔しくて、ぐつと歯を噛みしめると、弾(は)みで目尻(めじり)から熱いものが伝(つ)い落ちる。

「……泣かれるほど悔しいのでしたら、本物のお嬢様になることですね」

萱野はまた薫子の涙を拭(ぬ)った。

優しくして丁寧(ていねい)で、壊れ物を扱うような手つきに薫子は混乱する。

意地悪なのか優しいのかわからない……

「それにしても……」

ふつと短く息を吐き、萱野は眉を蹙めた。

「匂います……」

「？」

続けて言われた言葉に薫子も眉を蹙める。

「失礼」

萱野は自分の鼻を覆うようにして後部座席から出て行く。

「はっ？ 何？ 匂うって……。今度はそういうことを言っ私を馬鹿にするの？」

「いえ、とんでもありません。と言いますか、お嬢様ご自身では気づかれませんか？」

気づくって何を？ と思ひながら、薫子は学食から着たままになっている白衣の袖や襟の匂いを

嗅ぎ……

「あー」

確かに臭かった。

「うどん……」

学食で被ったうどんの汁の匂いが全身にこびりついていた。

「ええ。うどんです」

運転席に戻った萱野が忌々しげに呟いた。

「早くお屋敷に戻ってその匂いをなんとかしなければ……」

そう続けて言い、萱野はまたリムジンの運転に戻った。

懐かしい……

屋敷についたとたん、薫子は思わず泣きそうになった。母に遠慮して半ば無理矢理封じ込んできた記憶が、屋敷の門を潜った瞬間に溢れ出してくる。しかし、懐かしさに浸っている余裕はなかった。

玄関で出迎えてくれた使用人の中には昔馴染みも数人いて、薫子の帰還をととても喜んでくれたが、昔話をする間もなく、早く風呂へ入れと萱野に急ぎ立てられたからだ。

複数あるバスルームのうち一番近い所に入れられ、出てきた時には着替えらしきものが一式用意されていた。

これに着替えて大叔父様に会ってこと？

薫子は困惑した。

そこに置かれていたのは、いわゆるゴスロリ……いや、クラロリと呼ばれるジャンルに近い服装だったのだ。

他に着るものもないので仕方なく身につけて廊下に出ると、待ち構えていた萱野が、ご案内しますと言いながら薫子を先導した。

その速度があまりに速くて、薫子はつい小走りになる。

「廊下は走ってはいけないと学校で教わりませんでしたか？」

すると前から萱野の嫌味な台詞が聞こえ、薫子はむっとして立ち止まった。

「だって、スカートなんて慣れてないし、あなた……、萱……野の足が速いから……」

呼び捨てにしろと言われたのを思い出し、薫子は途中で詰まりながらもそう訴えた。

「そういえばお会いした時は、トレーナーにジーンズでしたね。白衣にもあちこち絵の具をつけて。まさか普段もあのような格好を？」

わずかに足を緩めつつ、萱野は聞いてきた。

「そうだけど？ 絵を描くのにはスカートってなんか邪魔だし。イーゼルに引っかけたり倒したりするし……。でも、白衣は絵を描いている時だけ着てるんだけど……」

そう答えると、萱野は何も答えずに、肩を軽く竦めた。

あつ。あの感じは絶対私のこと馬鹿にしてる。うん、そういう背中……

「何か言いたそうだけど？ スカートでまともに歩けないなんて、お嬢様失格だとか……」

「わかっていらっしやるじゃありませんか。でしたら私からは何も申し上げることはございません」

振り返りもせず言う態度が憎らしい。

「あな……、萱野こそいつもその格好なの？ まさかタキシードで大学まで来るなんて……。何かのコスプレかと思ったわよ。というか、今は私の格好までコスプレみたいになってるんですね」

どっ！」

ふりふりと頬を膨らませて言っていると、ようやく萱野はちらりとこちらを振り返った。

「急いでおりましたもので、着替える時間が惜しかったのです。先にご説明したというのに、車の中で再度お話ししなければならなくなり、今もお嬢様のお着替えに時間を要し……。あと五分しかありません」

萱野はもう前を向いている。

「これ以上旦那様をお待たせするわけには参りません」

「そう言われても……」

足がもつれて薫子は立ち止まってしまった。

「文句なら後でいくらでも聞きますから、走らずに、でも速く歩いてください」

気配で薫子が止まったのを感じたのだろう。萱野はそう告げると、また歩く速度を速めた。

「待って！ 待ってったらっ」

走らずに早くつて競歩？ 競歩なの？

競歩しろって言うのならしてやろうじゃないのっ。

文句は後で聞くと言っただけで萱野の言葉を信じたのもあつたけれど、何よりなんだか負けたくないという気持ちが湧いてきて、薫子は勢いよく足を踏み出した。

「薫子か……」

そう、弱々しい声で言っただけで兼須衛は、薫子の記憶よりもずっと老け込んでいた。その姿に薫子は思わず涙ぐむ。

あの頃から十三年以上経っているのだ、老けていて当然だし、薫子だって兼須衛の知っている幼い子供ではない。

しかし、薫子が涙ぐんだ理由は、兼須衛の外見が老けていたからではない。彼が鼻に酸素のチューブをつけていたからだ。

薫子の記憶にあるように、窓際に置かれた大きな椅子に座り、午後の——いや、もう夕方になつていたけれど——日差しを浴びて、お気に入りの本を読んでいる。

その姿は全く変わっていないかつたし、元氣そうに見えた。しかし、鼻から出ている透明なチューブが見た目通りに健康ではないと薫子に告げているようで、彼女の胸は締めつけられた。

余命幾許もない……

萱野はそう言っていた。だからこそ薫子が呼ばれたわけだが、どうにかならないのかと、薫子はますます涙ぐみつつ兼須衛を見つめた。

「大きくなったな。何年ぶりだろう？ 美大に行つて、今でも絵を描いているとか……」

「は、はい」

泣きたい気持ちを堪えて、薫子は精一杯微笑んだ。

「賞も取ったんだってね。誇りに思うよ。よければその絵を玄関ホールに飾らせてくれないか」
「いえ、あの、美大生限定のコンテストだったので大したことはないんです。飾るだなんて、とんでもない」

屋敷の玄関ホールに大家の作品がかかっていたのを思い出し、薫子は焦る。
「いや、私は薫子の描く絵が大好きだからね。昔のようにたくさん描いて見せておくれ」

兼須衛の言葉にこくりと頷くことしかできずにいると、彼は薫子に、側に来るよう手招いた。
子供の頃はそうやって呼ばれると、そのまま胸に飛び込んで抱きついたのだが、今はもうできない。
ない。

どうしたものかと躊躇っている、戸口の近くで控えていた萱野の小さな咳払いが聞こえた。
それに背中を押されて兼須衛の前まで進むと、兼須衛に両手をしっかりと握られた。

「済まなかったね。長い間放っておいて。もっと早く探していれば、一年も寂しい思いをさせなくて済んだのに……。亡くなったのだろうか？ あれとあれの連れ合いは」

あれとあれの連れ合いとは、母と義父を指す言葉だろう。

「便りがないのはいい知らせと思って、探す努力を怠った私を赦しておくれ」

「赦すも何も……」

泣いては駄目だと思うのに、堪えていたものが込み上げてくる。

涙を拭きたかったけれど、両手は兼須衛にしっかりと握られていて自由にならない。

「涼子も頑固だね。『再婚に反対するならそれでいい。二度とここには顔を出さないし、連絡も取

らない』と言い張ったんだ」

兼須衛は今度はきちんと薫子の母の名前を言って、懐かしむように目を細めた。

「再婚相手は教師だったから、東三条の家になさわしくないと……。当時まだ存命だった私の父が、とにかく反対していた。私は……。こう言ってはなんだが、再婚なら父が亡くなってからすればいいと言って、真剣に涼子の相談に乗らなかつたし、父を説得することもしなかつた。あの時もつと涼子の話を聞いてやっていけばと、今は後悔しているよ」

兼須衛の言う父とは、薫子にとっては曾祖父に当たる人物だ。

そういえば、「あなたのひいお爺様は、もうお年なのでここにはいないの。伊豆の別荘にいらっしやるのよ」と母が言っていたのを思い出した。

この屋敷に来たからだろう。少しずつだが子供の頃の記憶が甦り始めていた。

「後悔だなんて……。だいたい、反対していたのは、大叔父様じゃなくてその、ひいお爺様だったんでしょ？ それに私、この屋敷に来れないことは寂しかったけれど、義父と母のおかげで幸せでしたから……。もちろん、今だってそうですよ！ それに後悔と言うなら母も……。大叔父様に連絡を取ればよかつたって書き遺していました。だから私も、できれば大叔父様に連絡したいって思っていたんです」

連絡できなかったのは、兼須衛の名前や屋敷の場所を忘れてしまっていたからだ……。とはさすがに言えなかつた。

「ああ。薫子が幸せだったのは、今のお前を見ればわかるよ」

満面の笑みを浮かべる兼須衛。だが、すぐに顔を曇らせたため息をついた。

「兼人も幸せだといいいのだがね……」

「あっ……」

つられて、薫子の顔も曇ってしまう。

「あの……。なんで……」

「ん？」

「なんで兼人さんを探さないんですか？ 兼人さんが帰ってくれば、わざわざ私を養女にしなくても……」

萱野に話を聞いてからずつと疑問に思っていたことを、つい薫子は言ってしまった。

「薫子を養女にするのは、兼人がいてもいなくても同じだよ。今のお前には両親がいないのだから、私が親代わりになろうと思うのは当然だろう？ それに兼人は……、いや、それより薫子は、もう私の娘も同然。できれば早く婿でも取って、この家で幸せになってほしい。今からお前の花嫁姿が楽しみだ」

兼須衛は切実な瞳を薫子に向けていた。

しかし、いきなり娘だ婿だ跡を継げなどと言われても、現実感が伴わず、薫子はどう反応しているのかわからなかった。

兼人の話が途中になってしまったのも気になる。

ただ、兼須衛に自分の花嫁姿は見せてあげたい。母のように後悔はしたくないと思った。

一見元気そうに見えるけれど、本当はいつ容態が悪くなってもおかしくないのだろう。

こうして「元氣」で話せるうちに、できれば花嫁姿を見せてあげたい。

たった一人の肉親である、大好きな大叔父様に……

けれど、尻込みしたくなるのも事実だ。理性と感情がまだ一つにまとまっていない。心から「大叔父様の娘になって婿を取ります」とは、まだ言えない気分だ。

そういうことをあれこれ考えているうちに、ぐつと胸が詰まり、薫子は兼須衛をまともに見ていられなくなった。

その時ジリジリッと、古風なベルの音がした。

何の音だろう？

びっくりして音の出処を探ると、萱野が音同様に古めかしい目覚まし時計を止めながら、兼須衛に頷くように頭を下げていた。

「ちょうど四時二十三分か……。萱野は優秀だ。きちんと時間に間に合うように薫子を持ってきてくれた」

「え？」

ひどく中途半端な時間を聞かされ、薫子はなんの意味があるのかと、目を瞬かせる。

「薫子、これをお前に……」

そんな薫子の首に、兼須衛は懐から取り出した金のチェーンをかける。そのペンダントトップは青く輝いていた。

「昔ほしがっていただけだろう？ 私のネクタイピンを見て、お空の青だと……。こんな綺麗な色の宝石がほしいと」

「あ……。私そんなことを？」

壊れ物を扱うように、薫子はそつとそのペンダントトップを摘んだ。とても深い青だ。その色を見ているうちに、忘れていた思い出の一つが甦る。

キラキラした青に目を奪われ、ほしいとねだったら、「子供が身につけるにはまだ早い。大人になつたら……。成人したらあげよう」と言われたのを。

成人っていくつ？ と聞いた薫子に、兼須衛は二十歳だと返した。そうして、大人になったその時にこれと同じものをプレゼントするよと微笑んだのだ。

「ロイヤルブルーサファイアだ。気に入ってくればいいのだが」

気に入るも何もない。兼須衛が子供の他愛ないおねだりを覚えていてくれた。もうそれだけで嬉し。

「薫子、誕生日おめでとう。お前が生まれた時間に渡せてよかった」

「え、ええっ!？」

今日が自分の誕生日だなんて、すっかり忘れていた。ましてや生まれた時間なんて、気にしたこともない。

「おや？ そんなに驚くなんて……。まさか自分の誕生日を忘れていたのかい」

「あ、あの……」

義父と母が亡くなってから、悲しみを忘れるために、大学へ行つて絵を描くことだけを考えていた。そのせいだろう。薫子の時間はいつの間にか止まってしまっていたのだ。

「二十歳の誕生日おめでとう」

兼須衛のその言葉を聞いて、薫子の頬を涙が一筋伝った。

涙はロイヤルブルーサファイアの青い光の上に落ちて、輝きを増す。

「ありがとうございます」

——もう迷わない。私は大叔父様の娘になって、婿を迎えよう。

薫子は微笑み、涙で霞む兼須衛の顔を見つめ続けた。

「それでは、ここにサインを……。あとはこの書類を提出するだけです。これでお嬢様は、橋本から東三条になります。いずれは婿を取って跡を継ぐということになると思いますが、本当によろしいのですかね？」

そう説明するのは、瀬谷という名の兼須衛の弁護士だ。

瀬谷が養子縁組届の最終確認をしつつ、薫子を気遣う。

いくつかある応接室の一つ。テーブルの上には、ファイルケースに収めた書類と、コーヒーカーブが二人分置かれている。

なお、それを持って来た萱野は、もうこの部屋にはいない。

カップの隣には、兼須衛にもらったばかりのブルーサファイアのペンダントを収めた小箱。その蓋は開いている。

身につけておくより、今は手元で眺めていたい気分だったのだ。もちろん、慣れないことをして失くしたら大変という気持ちもあったのだが。

「東三条になるのは全く気になりません。婿を取って跡を継ぐというのも……。その……私はまだ学生ですので、今すぐに、というわけにはいきませんが」

「それはもちろんです。しかしこれで会長も本当にご安心なさるでしょう。薫子さんにとっては急なことで驚かれたと思いますが」

「急って、萱野さんもかなり急いでいるようでしたし……。まさか、大叔父様の容態に關係が？」
最悪の事態を予想して、胸を痛めながら聞くと、瀬谷は首を横に振った。

「いえ、違いますよ。退院直後ですので、まだ鼻のチューブをされていますが、容態自体は現在とても安定しています。まあ、進行性のものですので、完治なさることはないのですが……」

進行性の病……

その言葉は薫子に重くのしかかってきたけれど、現状は安定していることに安心する。

「急と言ったのは、その……、萱野君に強引に連れてこられたようですので」

「ああ！ はい、確かに」

思い出して、薫子は頬を膨らませた。

「本当に急だし、強引だったし」

「いやいや、彼は確かに少しやりすぎるところもありますが、悪気はないんですよ。どうしても本日のお誕生日にお嬢様をお連れしたかったのでしょう」

「あ……」

薫子の視界の端にブルーの煌めきが映り込んだ。

「会長は、病気の件に關係なく、お嬢様の二十歳の誕生日にはご本人を招いて贈り物をなさると決めていらっしやっただようで、ずいぶん前からあなたの居所を探されていました」

「えっ！ そうだったんですか!？」

「そんな折に倒れられて……。色々な条件が重なった結果、肝心のお嬢様との接触もままならず……」

瀬谷が薫子を見つめて苦笑した。

「……ひよっとして、私にお電話をしてくださってたり……?」

「お電話もしましたし、お手紙も一応」

「ごめんなさい。一人暮らしになってから知らない電話番号からの通話には出ないようにしてて……。でも、留守電を設定していたはずですが……あっ」

その留守番電話はろくに聞かず、折り返ししの電話もしていなかったと薫子は思い出す。言われてみれば、確かに何度か弁護士事務所からの電話が入っていたのだが、心当たりがないので何かの詐欺かと思ったのだ。もちろん手紙でもある。

「会長は当日であれば急がなくてもいいとおっしゃったのですが、萱野君がなんとしても誕生のお時間に間に合わせたいと、直接お迎えに上がったのです」

瀬谷はふうっと息を吐き出す。

「私は、本今朝から仕事の関係でこちらにおりましたから、そのまま私がお迎えに行くはずだったので、それがなかなか片つきませんで……」

それがどうしたのだろうかと薫子が首を傾げると、瀬谷はまた苦笑して続きを話し始めた。

「他に動ける者がいない以上、もう当日中にプレゼントを渡すことは難しいと会長はお諦めになってしまつて。とても寂しそうななさつていたところ、萱野くんが代わりに自分が行くこと立候補してくれました。自分も忙しいはずなのに、なんとしても時間に間に合わせますと……。きつと私のためでもあったのでしょうか。まあ、会長はこういうことでお怒りになる方ではございませんが」

あの萱野さん、いや、萱野が大叔父様のためにそこまで？ しかも瀬谷さんが怒られないように？

薫子は萱野の意外な一面を見た気がした。

やっぱり彼には優しいところもあるんだわ……

不意に車の中でそつと涙を拭つてもらつた感触が甦り、薫子の心に温かいものが広がる。

「そんなことがあつたんですね。いきなり学食に現れたので驚きました。もちろん大叔父様の話にも驚きましたけど……」

「先日、息苦しいとおっしゃつて、緊急入院されました。意識はあつたのですが、医師からは、家

族を集めたほうがいいと言われ……」

その時のことを思い出したのか、瀬谷の眉が曇つた。

「萱野君が、あなたと兼人さんをすぐにもお呼びするべきだと会長に進言なさいました。彼は本当によく気のつく男です。執事などしていないで東三条グループの本社に入るべきだと周囲は言いますが、こういうことがあると、やはり執事が天職なのかもしれないと思いますね」

「萱野さんが……」

瀬谷の前だからということもあるが、呼び捨てにすることはどうしても難しい。

ここに彼がいたなら、他人の前だからこそ呼び捨てにしろと言われそうだと、薫子はぼんやりと思つた。

「ええ。けれど会長は『兼人には知らせなくていい』とおっしゃつて」

「それ、どうしてなんですか？」

再会した兼須衛は、昔と変わらず優しくかつた。人は変わるものだと、萱野は意地悪な言い方をしていたけれど、絶対に何か理由があるはずだと薫子は勢い込んで聞いた。

「ああ、それは……。兼人様はミュージシャンを目指していらして、ここを出て行かれる時も、家を継ぐ気はないときっぱりおっしゃつて。書き置きにも、プロになるまで帰らないとありました。兼人様名義の預貯金もいまだに一切手つかずなんですよ。相当のお覚悟があるのだからと思えます。会長も、そんな兼人様の気持ちを尊重なさっているのではないのでしょうか。あくまでも私の推測ですが」

「ああ……。やっぱり大叔様は大叔様だ……」

薫子は瀬谷の話聞いてほっとした。

兼須衛は変わってなんかいない。兼人を探さないのも、愛しているからこそそうしたんだ……

「おや？ やっぱりとは？」

「あ、その、気にしないでください。私が勝手にあれこれ悩んでいただけですから」

「そうですか……。ともかく、その、これからは娘として会長を支えていただけると、私も嬉しいです」

「はい……。はい。もちろん」

薫子は、兼須衛のために精一杯頑張ろうと強く心に誓った。

「なんなのーっ！」

ドアを開けたとたん、薫子は思わず叫んでいた。先ほど瀬谷と別れて、今は子供の頃に泊まっていた部屋へ案内されたところだ。

「なんで私の荷物が全部ここにっ？」

屋敷に連れてこられた後、着替えをしたのはこの部屋だ。その時は子供の頃の記憶と同じ家具調度しかなかったはずなのだが。

部屋には今や、真新しいデスクの上に、普段使っているパソコンや教科書といった日用品の類が並んでいる。その傍らにはイーゼルや画材が置かれ、さらに壁面には大型テレビまで設置されていた。

「これ、これっ、ちよっ……。なに……」

「僭越ながら、お嬢様のお荷物を先ほどお運びいたしました。今日からこの東三条のお屋敷でお暮らしになると伺っておりますので」

戸口で哑然としていると、背後から声があった。振り返るまでもなく菅野だとわかる。

それにしても、彼は今、なんて言った？

「どういふこと？」

薫子は怖い顔をして振り返った。

「今申し上げた通りですが？」

瀬谷との会話で菅野を見直し始めていたけれど、やっぱり本性は意地悪なのではと薫子はむっとする。

「だからなんでそうなるんですかっ？」

「おわかりになりませんか？」

菅野は大げさに首を振った。

「わからないから聞いているのっ」

「あなたは今日から東三条家の人間なのですよ。まさか元の家に戻って暮らされるおつもりで？」

「そ、それは……」

薫子は言葉^{ことば}を濁した。

確かに萱野の言うこともわかる。橋本薫子ではなく東三条薫子になったのだ。家族が別々の家で暮らすのも変だし、何より兼須衛の側にいてあげたい。そのためにはこの屋敷で暮らすしかないだろう。

「で、でも、いきなりすぎます。だいたい他の荷物だつて……」

——まさか。

薫子は部屋の中に駆け込み、クローゼットや、備えつけのヴィクトリア朝のチェストの抽斗^{ひきだし}を片っ端^{はし}から開けてみた。

「え？ 何？」

そこには真新しい洋服や下着が入っていたが、予想を裏切つて、薫子が普段身につけていたものは何一つなかった。

「これはどういうこと？ なんで？」

嘩然^{あはれ}として突つ立っていると、また背後から萱野の声がかかる。

「今までの衣料品は必要ないかと思ひまして、こちらに持ち込んでおりません。パソコンや画材など、使い慣れた物の方がいいと私どもが判断したもののだけこちらに運ばせていただきました。画集^{えいしゅう}の類は図書室に移しております。それから……」

と、萱野は他の家具と同じデザインの写真立てを二つ、薫子に差し出した。

「あ、ママとパパの写真……」

引つたくるようにして萱野の手から受け取り、薫子はその場に座り込む。

二つの写真立てのうちの一つには実の父。もう一つには母と義父が収まっている。

この二つさえあれば、洋服や下着なんてなくてもいい。薫子はほっと一安心して、萱野を見つめた。

「ありがとう。持つてきてくれて」

「いえ。仕事ですから。ご仏壇やお位牌^{いはい}は見当たりませんでしたので、お写真だけになります。ご入用でしたら今から発注いたしますが」

「いらぬ。元々なかつたし」

両親達の写真を、薫子はさつそく新しいデスクの上に飾った。三人に「今日から新しい生活を始めます」と心の中で語りかけ……

ちよつと待つて私、和^{なご}んでいる場合じゃないでしょう。だいたい、服はともかく、し、下着まで用意するつて……

恥ずかしさから来る怒りで、薫子の顔は真っ赤になった。

「あのねっ！」

事前に一言もなく、人の家で勝手なことをしないでほしい。

そこははっきり主張しておかなければと勢い込んで振り返ったが、肝心の萱野はもういなかった。「な、なんなの全く……」

廊下へ出て菅野の姿を探すが、すでに影も形もない。もっとも薫子の部屋は、凸の字型に建てられた屋敷の中央にあるので、途中でどこかの部屋にでも入ったのかもしれない。適当に

「逃げ足速すぎっ。だいたい新しい下着をかうにしたらって、私のサイズ知ってるわけ？ 適当に買ったって合わないんだから！」

苛々しながら部屋に戻り、改めて用意された服や下着を見る。悔しいことにサイズはびたりと合っているし、色や形や素材までもが薫子の好みだ。

「なんでサイズが合ってるの？ もうっ、どこで調べたのよっ」
そう口を尖らせたとたん、不意に不安が襲いかかってきた。

私、本当にここで暮らすんだ……

子供の頃は夏休みや冬休みなどの長い休みを屋敷で過ごしていた。だから全く知らない場所というわけではない。

使用人も、ほとんどのに見覚えがある気がしたので、不安になる要素はないはずだ。

「ああ……。そうか……」

これは不安というより寂しきなんだ。

部屋を見回して、薫子は妙に納得した。

両親が亡くなってからずっと一人暮らしだったけれど、あの家には色々な思い出が詰まっていたので、あまり寂しきを感じずに済んだのだ。

しかし、この屋敷には何も無い。

ここにある思い出は……

「確かとつくくんが……」

いつも絵を描いていた薫子を真似たのだろう、とつくくんがクローゼット横の壁に青いクレヨンを塗りたくったのだ。

その場所を探そうとしたが見つからない。

「どこだったかな」

身長が伸びたから気づけないんだろうか？

周囲を見回して、薫子ははっとなる。

幼い頃、作りつけの家具にうつかりつけてしまった小さな傷が綺麗に修復されている。床やカーテン、窓ガラスさえも新しい。その上、落書きをしたはずの場所に、業務用の大きな空気清浄機が置かれていた。

ここ……

何も無い……

思い出の一つぐらい残してくれてもいいのに……

わかっている。私のために、わざわざここをリフォームしてくれたんだって、わかっている。でも、でも……

少しだけでも見たい……！

薫子は空気清浄機に手をかけた。けれど薫子一人の力では、重くてわずかに揺らすことしかでき

ない。

なんでこんな大きな物を……。家庭用のじゃ駄目だったの？

「お嬢様！ 何をなさっているんですかっ！」

もういなくなつたと思つた萱野の声がして、薫子はびくつと身体を強張らせた。

「妙な音がすると来てみれば……。おやめください」

萱野に腕を取られ、背後から羽交はがい締めはがにされた。

「何って、空気清浄機を動かそうとしているんだだけど？」

「それは見ればわかります。私が聞いているのは理由です。何故そのようなことをなさる必要があるのですか？」

薫子を羽交い締めにしたまま萱野は聞いてくる。

「何故って……。ここにとつくんの……」

「とつくん？」

聞き返す萱野の息が一瞬乱れる。

「そうよ。とつくん。彼がこの後ろの壁に落書きしたの。私の思い出なの」

「思い出？ それは……わかりましたが、それと空気清浄機を移動させることの関係は？」

その理由を聞くまで絶対に離さないという力と彼の体温が背中から伝わってきて、薫子は何故か動揺した。

「だから……。なんか寂しくて……」

そう言うのは恥ずかしかつたけれど、このまま羽交い締めはがにされた体勢ていせいでいる方がもつと恥ずかしいと気づき、薫子はうつむきながら答える。

「いきなり今日からここで暮らすとかつて……。なんだか寂しくて、子供の頃の思い出でもあれば……。あのね、ここにとつくんの落書きがあつたのを思い出したのよ。見たかつたの。私の大切な思い出なの。なのにつ……」

泣きそうになりながら言うと、不意に背中せなかの圧力が消えた。ほつとしたのも束の間つか、くるりと向きを変えられ、正面から顔を覗のぞき込まれる。

「そんなに過去の思い出が大切ですか？ それもとつくんとの？」

「え？」

そう聞いてきた萱野の表情がいやに冷たくて、薫子は一瞬息を呑んだ。

「ここでのことをよく覚えていないとおっしゃっていましたよね？ それなのに、今思い出したばかりの思い出が大切？」

ぎゅつと両肩を掴つかまれた。力が入っているのか、わずかに指が食い込んで痛い。

「だって、寂しくて……。これからの不安もあるし……」

なんだか萱野のことが怖くなつてきて、薫子は身体をよじつた。けれどうまく行かずにそのまま壁に身体を押しつけられてしまう。

「ここでの生活が不安？ あなたは天下の東三条のお嬢様になつたのですよ。何もかも思いのまま、どんな贅ぜいたく沢たくをしても許される身になつたのに？ 望めば一生好きな絵えだけを描いて生活することも

できるのですよ？」

「な、何……」

なんだか怖い。萱野が怖い……

何に対して怒っているんだろう？ 私そんなに悪いことをした？

それに、私は贅沢ぜいたくがしたいわけじゃない。

「贅沢なんてそんなの……」

望んでいないと言いかけて、はっと気づく。

世の中には毎日生きていくだけで精一杯の人もたくさんいる。大叔父様の愛情を受けて、何不自由ない生活まで約束されている私が不安だなんて文句を言うのはお門違いだ。

「ごめんなさい。私……」

生活が一変してしまう不安は確かにあるけれど、自分は恵まれているんだ。

そう思い直し、慌ててごめんなさいと言ったが、そのことを気づかせるための発言だとしても萱野の言い方は引つかかる。

「でも、子供の頃の思い出の一つくらい目に見える形で手元に置いておきたいじゃない。何も無いのは寂しいし、とつくんとその思い出を大切にしたいだけなんだし……」

反発から、ついそんなことを言っていた。

実際、どんなに恵まれていようとも、この寂しさだけはどうしようもない。

「また、とつくんですか……。そんなに……」

薫子を見つめる顔は怖いままだったけれど、目の奥にどこか苦しそうな光を宿して萱野は呟つぶやいた。それから何かを考えるように少しだけ目を瞑つぶったが、再び薫子を目に映した時には、その表情は意地悪な冷笑に変わっていた。

「そんなに寂しいのですしたら、私が抱いて差し上げましょうか？」

「はっ？」

いきなり何を言い出すんだと反論する暇もなく抱きしめられた。

「なっ……、やっ……」

慌てて逃げ出そうとしたが、背後は壁。それに加えて、萱野の腕の力は強かった。

「夜が寂しいのでしょうか？」

耳元に、吐息とともに萱野の低い声が落とされる。とたんに背中にむず痒かゆいような感覚が広がって、薫子はうろたえた。

腕から逃れようともがくのだけれど、全身の力が抜けてしまい、指さえうまく動かせない。

「毎晩私に抱かれて、昔のことなど思い出す間もなくなればいい」

「どうし……て？」

こんなことをするの。やめて……

大声を上げたいのになまく舌が回らない。それどころか、中途半端に開いた口は萱野の唇で塞がれた。

え？ 今、キスされてる……？